

今月のみことば 2025年7月

人々が一人の中風の人を、みもと(筆者注:イエスの所)に連れて来た。彼は四人の人に担がれていた。彼らは群衆のためにイエスに近づくことができなかったので、イエスが
おられるあたりの屋根をはがし、穴を開けて、中風の人が寝ている寝床をつり降ろした。

イエスは…(中略)…中風の人に言われた。「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい。」すると彼は立ち上がり、すぐに寝床を担ぎ、皆の前を出て行った。それで皆は驚き、「こんなことは、いまだかつて見たことがない」と言って神をあがめた。

(マルコ2章4-5節, 10-12節 抜粋)

イエス・キリストのもとへ

上記の言葉を読んで、どう感じられましたか。まず、「他人の家の屋根に穴を開ける」行為が非常識です。現代日本で同じことをしたら警察沙汰になるでしょう。しかし、2千年前のイスラエルでは、屋根の構造と材質が大きく違っていました。『イエス時代の日常生活』という本によると、当時の家の屋根は平らで薄く、木の枝等を編んだものを骨組みとして上に土をかぶせた造りでした。風雨にさらされ、毎年修繕が必要だったそうです。ですから、穴を開けることは簡単、直すことも難しくありませんでした。とはいえ、家主の怒りと罵倒は避けられません。四人は、怒りを受けること、修理と賠償の責任を負うことも覚悟して、穴を開けたのだと思います。彼らを駆り立てたものは何だったのでしょうか。この四人に注目してみます。

四人の態度で目を引くのが、必死さです。彼らの友人が「中風の人」と記されています。中風とは身体の麻痺を表します。彼は寝たきりだったのでしょう。四人は、この人を不憫に思いながらも、治す事はできませんでした。しかし、イエスという人物の噂を聞き、この人になら治せるかもしれない、と望みを持ったのです。大人一人を四人で運んでいける距離には限界があります。自動車が無い時代です。それでも、噂をたよりに、相当の距離を担いで行ったことでしょう。何日もかかったかもしれません。



やっとの思いでイエスがいる家を探し当てるも、人、人、人でごった返して中に入れません。出待ちをすれば良いのではないか？ いや、群衆に取り囲まれたまま、話しかけることもできずに行ってしまうのを恐れた、のかも知れません。数メートル先にいるイエスに、なんとかしてこの人を会わせたい。その必死の願いで、いてもたってもいられなくなった矢先の行動だったのだ、と思います。そして、イエスは、彼らの必死さに応えられました。

聖書は、このイエスは今も生きている、と語ります。それは、信じる者の心の中で生きている、とか、遺した教えの中に息づいている、とかいった観念的なことではありません。目には見えませんが、私たちの友となり、私たちの苦悩を受け止めてくださる、というのです。イエスは、必死に訴える者に応えてくださいます。

私たちが、見えないイエスと出会う道しるべになってくれるのが聖書です。ぜひ聖書を読んでみてください。(Y)